

# 文芸部会誌 二〇一七年翔愛祭号

翔愛学園文芸部

# まえがき

時の流れは早く、私が部長になってからもう二年の月日が経とうとしています。今日までこのように続けて来れたのは、部員の皆さんや作品をお寄せくださる方、そして読者の皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

今回は、部会での話し合いを経て、テーマ枠を設けることになりました。秋の夜長に、「月」を見ながら読書をする、とても心が穏やかになります。

ぜひおすすめしたいのですが、ひとつだけ。風邪などひかれぬようにして下さいね。

それでは、二〇一七年翔愛祭号をお楽しみください。

文芸部部长 恋音ちひろ

今年もあとわずかになったと同時に寒くなってきましたが、今回も無事に会誌を出すことが出来ました。

今回はテーマを設けて書いてみると言う試みも行われ、いろいろな作品が出てきました。

テーマ外の作品もあり、いろいろな作品が楽しめると思います。楽しい話、切ない話とあるかもしれませんが、少しでも楽しんでもらえたらと思います。

読んでもらった人に作品の世界や景色が思い浮かんでもらえたら良いなと思いますし、そうになったら嬉しいなと思います。では短いですが、今回はこの辺にて終わりにしたいと思います。

文芸部副部长 レナード・グレイスノート

# 目次

## テーマ作品「月」

月明かりの空の下

レナード・グレイスノート

… 4

白い月

花菱 源之丞

… 6

月光 — Moonlight —

レナード・グレイスノート

… 8

月が、見ていた

叶 冬姫

… 11

うた。

恋音 ちひろ

… 25

月と少女と黒猫と

レナード・グレイスノート

… 28

## テーマ外作品

朱色の橋の話

恋音 ちひろ

… 32

手を振る少女

— 中編 —

卯月 美雪

… 39

執筆者メッセージ・編集室から

… 44

# テーマ作品「月」

# 月明かりの空の下

## レナード・グレイスノート

空も暗くなった頃、虫の音達をBGMにテントから一人の旅人が姿を現した。

年齢は十代前半の子供ぐらい。少し眠そうな顔をしてぼんやりと空を見上げる。

「こうみると、やっぱり月は綺麗だねえ……」

そう言つてその子は一度寢床の近くにあつたりユックからヤカンとカップを持ってくる。

「よいしょと……」

その子はお湯を沸かす準備を始め、夜の時に少し余った薪を使つて火をおこし始める。良い具合に薪が燃えるまでの間……近くの川に行つてヤカンに水を入れ、お茶を煎れる準備を始めたのだった。

「……」

旅人が思わず空を見上げると、空は雲一つ無い満月の空である。

その旅人は思わずお茶を煎れる手を止め、その月に魅入っている。

「……」

その旅人の目の前を一匹の蛍が飛んでいき、旅人はその蛍を目で追いかけ始めた。

蛍は旅人のことを気にかけて様子もなく近くの茂みに入り、その蛍をみた旅人はお茶の道具を置いて茂みの中に入っていく。茂みを抜けた先には小さな湖があり、その湖に先程の満月の光が反射していた。

「あつ……」

その景色を見た旅人は思わず声を上げてしまい、その声に反応したのか……茂みにいた蛍たちが一斉に湖の周りを飛び始める。

その様子は普段見ることが出来ない幻想的な物だった。

「うわああ。すごいなあ……」

歌うように飛んでいた蛍をみて、旅人は再度声を上げる。「街の中だとかこういう景色って見かけることないから、なおさらなんだろうね」

その子がそう言っていた時、遠くで火にかけていたヤカンよりお湯が出来たという音が聞こえた様だ。

「おっと、そうだったそうだった」

その子はそう言った後、蛍たちに「良い景色を見せてくれて

ありがとう」と言つてその場を後にした。

「んー、お茶が美味しい」

その子は自分で入れた紅茶に砂糖を入れ、幸せそうに飲んでいる。

そして月を見上げ、思ったことを言い始めた。

「月って、おそらく昔から人を魅了する何かがあるんだろうね。日によつて月の見え方も変わつてくるし、月には魔力があるって話もあるから……」

こうやつて何も光がないところで満月をみると、本当にこの星が丸いんだなつて言うのがよくわかるし、何時までもみていたいなつて思う。

月だけじゃない、星なども綺麗に映るから余計にそう思うんだらうな。

こういう綺麗な景色を見ることが出来て、ボクは幸せなのかもしれない。

これからこういうことが何度もあるんだろうけど、その度にボクはこの月の綺麗さにびっくりするんだらうな。

みんなはこの月の景色を見て、なんて思うんだらうねえ

……」

その子はしばらく紅茶を飲みながら月を見ているが、紅茶を飲み終えた後は火を消して、再び寢床の方に入っていく。

「明日はまた色々と歩きたいから、今日はもうおやすみ」  
そう言つてその子はぐっすりと寝てしまったのだった。

「んー……」

翌朝目を覚ましたその子は、寢床などを片付けて出発する準備を始める。

「さて、目的の街まではどのぐらいあるのかな？」

そう言つてその子は地図を取り出して場所の確認をする。

「大体この辺りが現在地だから、もう少しで目的地の街なのか」  
そういつてその場所から歩き出そうとして、現在地と方角を確認する。

「今日はどんな発見があるのかな。想像するだけで色々と楽しみななあ」

その子はそう言つと、鼻歌を歌いながら目的地へと歩き始めたのだった。

# 白い月

花菱 源之丞

夏の気配を台風が押し流した明け方の空に、僕は一人で立っていた。

本当は空に立つことなど不可能だと知っているのに、高層階から見上げる空は、そんな錯覚を呼び起こして頭が痛くなる。ドアを開けた瞬間に吹きこんできた名残の風も、そんな気分を助長させたのかも知れない。

空が好きだったのは一体幾つの頃までだったろうか。

見上げる淡い青の中を過ぎてゆく白い雲に、意識をさらわれ吸い上げられていった青春は、もはや遠い日の記憶としてしか残っていない。

いつの間にか慣れてしまった日常が、気づかないうちに自分を蝕んでいたことを、こんな事になってようやく思い知るのだ。

「痛いな・・・」

訴えられる相手が居なければ、人は痛いと言えないらしい。

そんな話をかつてどこかで聞いたのを思い出して、敢えて口に出してみる。

当然ながら答える声は無く、体のあちこちに走る痛みが、心なしか一段増したような気がした。

ピリリリリリ、と手のひらの中で唐突に鳴りはじめた携帯に、無意識に体がびくりと固まった。

三年前の夏の日に、些細な行き違いから彼女と別れて以降、携帯はほぼ時計代わりでそれ以上の役目を持っていなかった。スマートフォンに買い換えると彼女はしつこく勧めていたが、用を為さなくなった今となつてはそのまま良かったとほっとしている。

いや、そんな事にほっとすること自体がおかしいのだろうが。

電話の着信音と同じ音に設定していたアラームが、出勤のために必要な起床の限界の時刻を告げていた。

もはや自分が出勤する会社など無いのに、けたたましい音は追い立てるように鳴るのをやめない。

アラームの設定を変えなければ、電池が切れるまでこうして

毎朝鳴り続けるのだろう。

アラームを切って、設定も変えておくかと画面を見て、そんな事をしてもはや大した意味はないのだと気付いた。

このまま放っておいてもいずれ鳴らなくなる。せいぜい通りすがりに聞いた誰かが驚く程度で、そんな誰かもきつともう居ない。

そもそも時計だって既に正しいかどうか分からないのだ。腕時計をしない僕には他に時刻を知る方法が無いだけで。

唐突に、激しい疲労感に襲われた。

膝から崩れそうになる体を、無理やり前に進めてフェンスに手を伸ばし、何とか掴んで引き寄せる。

眼下の光景を見たくなかったが、前のめりにフェンスに寄りかかった途端に、それは視界いっぱいに広がった。

それはまるで、出来の悪い映画のワンシーンのようで。

現実感の全くない、ジオラマを叩き壊して撮影したものを、これでもかと拡大して画面に大写しにしたかのようで。

けれどその悪趣味なジオラマの中には自分も居るのだと、そう思う事を心の中で拒否し続けていたのだ。

五日前。僕の暮らしていた世界は悪趣味なジオラマへと一瞬で変貌した。

その一瞬に、偶然その変貌を受け付けにくい場所に居たというだけで、僕は取り残されたのだ。

どこへ行くこともできず、帰る場所もない。自分と共に残されたわずかな食糧も既に尽きてしまった。

せめて空を見たいと思った。取り残された僕が、いずれジオラマの一部となる前に。

ゆっくりと顔を上げて、壊れたジオラマを自分の視界から遠ざけて行く。

子供の頃に焦がれた空に、今一度僕の全てを明け渡し、そして還ろうと決めてここへ来た。

雨と風に洗い流されたばかりの空は、地上の惨状など気のせいだったかと錯覚するほど青く、雲一つ無い。

西の空にはぼんやりと、沈みきらなかった月が、いまだ白く残っていた。

# 月光 —Moonlight—

## レナード・グレイスノート

途中、法被姿の大人とすれ違う。

「ああそういえば、今日が街の納涼祭だっけ……」

「まったく、なんのためにここまで来てると思ってるの？」

ツレが言ったことで今日が納涼祭だということを思い出し、

二人で坂道を上り出す。

「だいぶ、この街も変わっちゃったね」

「ああ……」

「昔はこの辺りって何もなかったから、月が綺麗に見えていたんだけどなあ……」

俺のツレ——黒髪ショートカットの彼女がそんなことをぼそりと口にする。

「ああ、そうだな。前は月が綺麗だったから……街灯なんてものもいらなかった」

「まあね。小学校低学年の時に人工衛星がたくさん落ちたけど、よくその大災害がこの程度で済んだと思うし、よくここまで復旧したと思うよ」

「一時期、原始時代か」と言うところまで退化したからな。

ここまで復旧しただけでも良いかもしれない」

俺達が他愛のない会話をしながら坂道を歩いていると、

その日は珍しく空が綺麗だった。

月明かりのためか、いつもの夜と比べて空が明るい。

そして加えて街の灯りが少ないこの辺りでは、星も綺麗に

河になっていた。

「こんな景色、久々に見るな……。ここ数週間、ずっと霧がでていたせいで月なんて見えなかったし……」

と言うことを思いつつ俺は目の前にある坂道を上っていた。

過去に人類が打ち上げた衛星が宇宙から墜落し、今まで培われた文明が滅び去ってから十数年……

当初はもはや草木などは生えないかと思われていたが、今では立派に草木が生えるようになっていそうだ。しかしその傷はまだ完全に癒えていないのか、普段は昼夜問わず埃<sup>ガス</sup>という可変な霧が辺りを覆っている。

その所為か、普段は空を見たりするなんてことはない。

見たって何も見えないからだ。

そんな事実を改めて思い出しながら、蟬や鈴虫達が鳴いているガードレールの坂道をツレと一緒に歩いている。



時折浴衣姿のカップルや親子連れが歩いているのを見かける。ちなみに俺は紺の半袖に長ズボンという夏とは少しずれた格好をしており、前を歩いているツレは白の半袖にハーフパンツ。スニーカーといった格好だ。

そんな彼女に向かって俺は軽く「はしやぎすぎて転けるなよ」と言うと、彼女は「大丈夫、そんなへましないから」と俺の心配を余所に、元気にはしゃいでいた。

まったく、それでよく彼女はそそっかしいから余計に心配なんだがな。その自信はどこから来るんだか……。

まああれだ。ずっと一緒にいるから、余計に彼女のことはわかるし、心配なんだよな。

って転けたら、その時は助けるかもしれないけれど……彼女が腐れ縁とか、幼なじみとか、そんな感じだ。申し訳ないが恋人とかそういうものじゃない。

そんなことを考えつつ……二人で道路——昔はよく使われていたと思われる道路を——ゆつくり歩く。なぜならば、これから行われる花火大会をいい場所から眺めるためだ。

「ねえねえ、今日は綺麗に晴れて良かったね。」

ここ数週間、ずっと霧がでていたせいで月なんて見えなかったからっ」

久々に行われる花火大会を見れるのが嬉しいのか、既に

二十歳<sup>はたち</sup>を越えている彼女は無邪気な子供みたいにわくわくしている。

まったく、二十歳<sup>はたち</sup>を過ぎてよくはしゃげると思う。

「ああ、そうだな……。」

今日は珍しく晴れているな」

俺はそう答えながら手元の時計に目をやる。

時刻は既に一九時五十八分。そろそろ花火大会が始まる時間だ。

「そろそろか……」

自分たちの住んでいる町が綺麗に見える。

そんな場所まで来た俺達は、その後「少し急ぐか」と足を早める。

ひゅるるるる……ドーン

開幕の花火がうちあがった。

それを見た彼女は「ねえねえ、目的地には着いていないけどここで見ようよ」と俺に提案してくる。

ひゅるるる……ドーンドーン

二発目の花火だ。

思わず空を見上げた時、彼女の急かす声が聞こえてきた。

「ねえ祐、みてみて」

俺の名前を呼んだ彼女の声の方に「なんだよ」と視点をゆっくりと落とした時、手招いている彼女をバックに、珍しく綺麗な満月が輝いていた。

# 月が、見ていた

叶 冬姫

月は不実だと、かの偉大な劇作家ウィリアム・シェイクスピアは描いた。夜毎姿を変えていく様が不実だと。その姿に愛を誓ってはいけなさと。

月が不実だと云うのなら、その姿を見る瞳はどこまで誠実だというのだろう。

月を不実と見て取る人の心がどこまで純粹だというのだろう。

\* \* \*

ミツイセイイチとホリユウヤはゆつくりと飲みながら酔いを楽しんでた。特にユウヤは飲む前から疲れていたの、いつもより酔いの周りが早いと感じていた。そして、それが有難いとも。

街の夜景が全面の窓に見える部屋。洗足池にある瀟洒なマンションは遮るものがなく風景を楽しむように作られている。その最上階のすべてを一人で使って生活するような人種がいるなど、ユウヤはセイイチに出会うまで空想の産物だと思っていた。そして、その空想の産物は自分とは絶対に

相容れないような奴だろうとも。

前面の窓の向かうように置かれたソファアに座っているセイイチはゆつくりとグラスに口をつけ、酒を味わっている。瞳は窓の向こうの月を見ている。

オーディオセットからはジャニス・イアンが流れている。今日は満月に一日足りないが、それでも月は東京の夜空を装飾している。

ユウヤはちょうどテーブルを挟んで九〇度に当たる場所の一人掛け用のソファアに座っていたが、窓が全面的なので何の苦も無くセイイチと同じように月を眺めることができた。

セイイチは月が好きで、東京でも月が見えるこのマンションを選んで住めるほど裕福な家庭に生まれた青年だ。

だが、好きな月の物を飾ったコレクションテーブルの上は無造作にスパーで買った総菜を並べる経済観念も備えてるし、あり合わせで簡単なたまみも作ることもできるという庶民的なところもある。

ユウヤの背中側にはホームバーがあつてそこでさつと足りない野菜系のつまみ——例えばバーニヤカウダなど——を作ってしまうのだ。

壁際には本棚。天文関係、特に月に関する本が多い。そのラインナップは専門書だけでなく、文庫本、子供の頃から大事にしていたのだから絵本や図鑑まである。

オーディオセットもそこにあつて、耳障りにならない心地よさで音楽を部屋に満たす。あとは、三台の天体望遠鏡と、シド・ミードのポスターが貼られた空間。

ここはセイイチが月を眺め考えるためにだけに、好きなものだけを集めた部屋だ。だが、不思議と排除されるような感じはなく、むしろ居心地はよい。

まるでセイイチそのもののような部屋だとユウヤは思う。

今夜もユウヤが相談事があると告げたら、「じゃ一日早いけど月見酒でもしようか」とさらりと返し、そしてユウヤがまだその相談事について、何も言い出せずにいるのを自然体で待っている。

ユウヤはセイイチと初めて会った時のことを覚えていない。セイイチも「多分何処かのサークルの飲み会だった気がするよ」と答える。

ユウヤとセイイチは学部は違うが同じ大学に所属していて、いつの間にか気が合い、交友するようになった。その関係はユウヤが就職、セイイチが修士課程に進んだ今でも続いている。サークルでの大騒ぎして飲むような飲み会の乗りではなく、

バーで静かに語らないながら飲むような関係だ。個人的な問題の時はさらりと部屋に案内してくれる。

セイイチとただゆっくりと酒を飲むというのは最初こそ新鮮だったが、慣れていくにしたがつてこの世には言葉を尽くさなくてもよい関係があるという事をユウヤは知っていた。

社会人一年目は忙しく、五月に一度来たきりだったのだが、部屋もセイイチも変わらずにそこにあった。

ふうとユウヤは息を吐く。部屋は暖かいので息が白くなる事はないのだが、ユウヤは自分の中にある『濁り』のようなものが出て行って、それが白く見えるように感じた。

だがその濁りはセイイチの部屋では綺麗に霧散していく。消えることはないが、溶け込んで月の光に晒されていく。

「あのな」

「なんだい」

濁りを吐き出しても、受け止めて、溶け込ませていくセイイチにユウヤは続ける。

「エリナに連絡がつかないんだ」

「イトウさんに？」

イトウエリナはユウヤの恋人だ。

「着信拒否とか、ブロックとかそういうのかい」

「まあそれもあるんだけど…」

「でもイトウさん以前から時々していたよね」

セイイチの言う通りエリナは機嫌が悪くなるとすぐ連絡手段を断つという事を繰り返していた。それも何かを経由してユウヤから連絡が可能な手段を残しておきながらだ。

その残された手段をたどっていけば、エリナの機嫌は必ずなおる。何度繰り返した事だろうか。

「ああ。だからいつもと同じだと思ってただけだな」

ユウヤが就職活動に明け暮れはじめた頃も、エリナは『寂しい』と言って同じことを繰り返していた。

そしてユウヤには段々そういうあざとい可愛さを甘受できる時間も余裕もなくなっていた。

それに気づかず繰り返すのは、エリナが単純に年下であるというせいではなく、配慮が出来ない娘なのだと気づいてしまった。

相手の事を考えずに自分だけを可愛がるエリナがいつか変わってくれる日がくるのだろうと楽天的に考えていた事に、社会人になって気が付いた。

大学時代はどこかお気楽だったのだろう。

「今回は全くなんだ」

「どれくらい」

「半月は過ぎてるかな…最初は気付かなかったかもしれない」

恋人の変化に最初は気付かなかったなど普通なら恥ずかしい事なのだろうが、セイイチになら言える。

「それはよくないね」

普通ならこの言葉をユウヤは責められると感じるだろう。セイイチ以外の誰かであれば。

だが、セイイチは気に入りの擦りガラスに月と狼のモチーフが入ったグラスをいじりながらただ告げてきたのだ。その状況はよくないねと。

「南青山のアパートには行って見たのかい」

「留守か居留守か分からない。人の気配は無かった。鍵も合わなかった」

気配が無かったと言いながら居留守を疑う自分に嫌気がさしながらも、ユウヤは意外とあっさり言えたことに軽い驚きを感じた。

ユウヤが住んでいる赤坂からエリナのアパートまで行って見たのは昨日のことで、やっと仕事が一段落ついた金曜の夜だ。さすがに鍵まで替えられているという状況に驚いて、一晚悩んだ末セイイチに連絡してしまったのだ。

もつとするべき事が他にあるはずだろう……と自分でも思いつつ、ユウヤも月と狼のモチーフが入ったグラスをいじる。

ユウヤのは草原を走る狼の姿で色は若葉色、セイイチのは森で休む狼の姿で色は桔梗色だ。

「それはよくないね」

眉根を寄せてセイイチは告げながら、グラスを口元にもっていく。グラスを干したセイイチが、すこし体勢を代えて、ユウヤの瞳をまっすぐ見ってくる。

「ボクはイトウさんとは繋がってはいないのだけれど……」

コレクションテーブルの上の端末に軽く触れながらセイイチは続ける。

「誰か知ってる人がいるかもしれないから尋ねてみようか」

セイイチの知り合いにエリナの今の状況を知っている人がいるのだろうか。だが、このご時世テーブルの上の端末一つで信じられない繋がりが出来る。まるで網目のように。

ふと、月に関する物をコレクションしたテーブルにこれで少女趣味にならないのがセイイチだよなとユウヤは思った。

こんな風に、部屋も言葉も行動も整っていてまるで一人で生きているかのように見えるのに、セイイチもきちんと人と繋がっているのだ。

「ユウヤ」

黙り込んでしまった自分に声をかけてきたセイイチに、ユウヤは慌てて反応を返す。

「何て言うのかな、振られたとか、『別れよう』とか言われたわけではないからさ。本当にどうしたらいいのか判らないんだ」

追いかければいいのか、このま放っておくべきなのか。

「エリナの意志だしさ」

この言い方は我ながら狡いなとユウヤは思う。思ったので、ユウヤはセイイチに自分の思いを吐露し始めた。

正直、昨日アパートに行くまでいつもの我儘だと思っていた。忙しいのが判っているのに、そうした事をするエリナに腹が立つというより呆れた。

一応エリナに電話をかけて、共通の友人にも尋ねたりもしたが、それはそれをしておけば言い訳が立つというおぼろげなものだった。

「結局面倒くさくなってるんだよ。ひどいよな」

自分の考えをまとめると、ユウヤはグラスを仰ぐうとして空なこと気づいた。そんなユウヤのグラスにセイイチは酒を注ぐ。そして告げる。

「どうしてひどいのだい。こんな事面倒くさくて当たり前じゃないか」

あっさりとセイイチに言われユウヤは少しムツとする。

「だって恋人だぞ」

「恋人だろうが、友人だろうが、家族だろうが面倒くさいものは面倒くさいだろう。いきなり音信不通だなんて」

あくまでも状況を明確にしてくるセイイチ。

「でもユウヤは、連絡を取ろうとしているし、家にも行っているじゃないか。こうしてボクに相談にも来ている。ユウヤは優しいんだよ」

面倒くさいと思うことは当然だが、行動しているではないかとセイイチはどこまでも穏やかに告げる。誰だって思うものだ。

考えるだけで止まる人間と、面倒くさくても行動する人間では雲泥の差があると続けた。

「ボクはユウヤのそういうところが大好きだよ」

「お前な」

不思議そうに見つめてくるセイイチにユウヤの方が照れて、そして、いいのかと思う。自分はこれでもいいのかと。

「エリナの事尋ねてみてくれ」

「わかった」

結局やはり気になるのだ。こうやってセイイチと穏やかに話していればせめて元氣かどうか分かれればいいと思う。話し合いをして納得したいとも思う。

だがきつと一人になれば腹も立つし、ふざけるなとも思うだろうし。やっぱり面倒くさいし。どれも自分の感情なのだ。何だかユウヤは笑いたいのか、泣きたいのかわからず月を見た。

「綺麗だなー」

満月には一日足りない歪な月。

それでもとても綺麗だ。

本当はセイイチ狙いで自分に近づいてきたことを知っている。そんなエリナではあったが、可愛いと思っていた頃があったのだ。

そして今でも多分、嫌いではないのだ。だが、好き嫌いに関わらず面倒くさくなることがあるのだと。

「あ、ミノ先生からだ。イトウさん先月から大学にも来ていないらしいよ。講義も四連続欠席だって」

「マジかよ」

光る端末をいじりながらセイイチは続ける。

「先生もそれ以上の事は知らないみたいだ」

ユウヤの知る限り、エリナの単位はいつもぎりぎりだった。ゆえに計画的に取った講義を休むなど、まず普通ではありえない。

そういえば就職活動もしているようだったが、きちんと

聞いてあげられなかったような気がする。何かが起きているのだろうか。

「あ、タカトリさんが何か知ってるみたいだって噂があるみたいだよ」

「は？　なんでタカトリがエリナのこと知ってるんだよ」

「そうだね」

タカトリユキとイトウエリナはいわゆる犬猿の仲だ。

ユキはエリナの『高校生の時から読者モデルやってたの』を武器にしたお姫様気取りを馬鹿にしていたし、そんなユキを『ちよつと人より可愛いくらいで、医学部で頭がいいからといって何様のつもり？』だとエリナも嫌っている。

それは女性同士の人間関係に疎い男性の間でも有名な話で、そんなタカトリユキがエリナのことを知っているというのは怪訝なことではない。

「ボク、タカトリさんの電話番号なら知っているけれど」

セイイチの言葉にユウやはしばらく考えて、タカトリユキに連絡を取ってくれと頼んだ。

タカトリユキが電話に出なかったので、留守番対応に『イトウエリナさんのことで尋ねたい事があるので』と、

セイイチが告げてくれた。

折り返しの電話があるかユウやは不安だったがこれ以外に何のつてもないのも事実だ。

「もう時間も時間だし、明日になるかもしれないね」

「そうだな」

実際女性に電話をかけてよいような時間帯も過ぎているし、タカトリユキも確か大学院留学に向けてすべてが佳境に入っているだろう。

何かが分かったわけでもないのに、明日まで待つしかないというのに、ユウヤはいきなり急に気が抜けてしまった。何一つエリナへ繋がったわけではないのに。

「やるべきことはやったと思うし、今夜はこれでいいのじゃないかな」

セイイチの言葉にユウヤはソファに沈み込むように座って考え込む。

「どうしたの」

「いや、何かとても大事なことを忘れている気がして」

ユウヤの言葉に今度はセイイチが首を傾げる。

「何もないと思うけれど」

「だよな」

口ではそう答えながらもユウヤの表情は納得がいつていない



と物語っている。

「ボクは片づけをするね」

「あ、悪い。手伝う」

すでにつまみはなくなっていて、空いた皿があるだけだ。その小皿を手早く集めながらセイイチは腰を浮かせかけたユウヤを制する。

「いいよこれくらい。ユウヤは疲れているだろう」

「サンキュ」

「それに納得できないって顔してるよ」

何か大事なことを忘れている。そう思いながらユウヤはソファーに身を沈める。背後からはセイイチが食器を洗う水音と、ガラスが触れ合う音が聞こえてきた。

考えれば考えるほどその大事なことはすると月明かりに溶けていくようで、引つ掛かりを掴もうとすればするほどユウヤは夜に誘われていく。

部屋に差し込む月灯り。何か忘れていた大事なこと。月を飾ったコレクションテール。本棚の影。歌劇「ルサルカ」のARIA「月に寄せる歌」。セイイチそのものような部屋。

「お前ってなんで月が好きなんだ」

ふと初めて浮かんだ疑問。

ユウヤの言葉は水の音と歌声に遮られて、セイイチには

届かなかった様だ。

疲れと、酔いと、掴めない思考。水音と歌声。心地よいソファー。セイイチの気配が溶け込んだ部屋でユウヤはいつの間にか思考の糸を手放した。

\* \* \*

どうして月が好きかだって？ そうだね、夢を見たせいだと思ふよ。あれは小学生の時だったよ。何故、そんな夢を見たのかは判らない。

でも、その日に学校であつた出来事は覚えているよ。未だにそれがきっかけだったのかは判らないけれどね。

僕はいつものように学校に行つたんだ。僕はいつもと変わらなかったんだよ。でもね、その日の教室はいつもと違つたんだ。ある男の子がね、もう一人の男の子をからかつていたんだ。

ああ、誤解しないほしい。それも本当ならいつものことだね。その二人は本当に羨ましいくらい仲が良かったし、ふざけあって、からかいあって、それでも大丈夫なくらいにね。

だから二人のそれは、いつも教室の雰囲気をやかにするものだったんだ。

でもその日は違った。ぎりぎりの綱渡りの綱に、誰かが悪戯でナイフを当てたような感覚。後は少し力をいれるだけっていう…はつきり言おう。いじめが始まる瞬間だった。教室の雰囲気はね…これもはつきり言おう。期待に膨らんでいたよ。僕はとても嫌な気持ちになってね。つい、眉をひそめてしまったんだ。

そうするとね、その二人も、教室の雰囲気も何事もなかったようにいつもの和やかな雰囲気に戻ったんだよ。僕はとてもほっとしたよ。当たり前だろう？

なのに、その夜、夢を見たんだ。信じられないくらい大きな月がね宙に浮かんでいるんだ。光っているから夜だとやっと判るくらい大きな月がね、宙いっぱい浮かんでいるんだ。どうして落ちてこないんだってだろうって僕は思ったよ。

ああ、この月に僕は押し潰されるって思って、それで、これは夢だって気づいてね。それから、さらにあの月は僕を絶対に押し潰すんだって思ったよ。

押し潰されることも夢だってことも分かっているのに、僕はね呑気に、ああ、静かの海があんなに綺麗に見えるって思っていたよ。

きつと、覚えたばかりの言葉だったからじゃないかな。静かの海。綺麗な名前じゃないか。心に残るよね。それでね、

僕は僕を絶対に押し潰す大きな月をね、ゆっくり眺めていたんだ。

月がどんどん光を失って、周りが赤くなつて…月だけですべての視界ををふさぐほど大きくて動かないのに朝焼けはちゃんと来たんだ。さすが、夢だよ。

そして夢の中で夜が明けると同時に僕は目を覚ましてね。

とても腹が立ったんだ。僕があんなに何かに腹を立てたのは、僕が覚えてる限りではあれが初めてだったね。

だって、嫌なものをみて、嫌な気持ちになって、嫌だなんて、やめて欲しいなって思うのは当然のことじゃないか。

それなのにあの月は僕を咎めたんだ。自然の流れを、起こりうる当然の出来事を僕が無理矢理止めたんだってね。大きな月が落ちないような不自然なことをお前はしたんだってね。

冗談じゃない。嫌なものを見て嫌だなんて思うのは自然な反応じゃないか。どうして僕が咎められなきゃいけないんだ。そう思うとね、本当に腹が立ったんだよ。

だから、僕は月が大嫌いになったんだ。

あれ？ ユウヤもう寝ちゃったの？ そう、僕はね月が嫌いなんだ。

セイイチは静かに窓辺に、ユウヤのそばに近寄っていく。夢にも負けないほどの浩浩とした月明りだけで成り立つ部屋を。そう、この部屋の明かりは月明りだけで成り立っている。

まあ、僕の深層心理が見せた夢なんだろうって今なら判るけどね。小学生の時は理不尽だとか、そう云う事すらも分からなくてね。

月は太陽の光を反射して光っている事は授業で習っていたからね。

自分だって、ただの自然現象のくせにどうして僕を咎めるのかって、ただひたすら腹を立てて：それぐらい怖かったんだ。だから、学校で習うこと以外のことも全部月のことを調べて暴いてそんなことやめさせよう思っただよ。我ながら傲慢な子供だよ。でもね。それぐらい。怖かったんだよ。

そして、残念なことに、今でもその夢を見るんだ。そう、僕が嫌だな、やめてほしいな、嫌いだなって思うとね：僕って顔に出やすいのかな？

何故か、僕の周りの人はね。僕の嫌がることはしてはいけない、させてはいけないって反応してくれるんだよ。その度に月の夢を見るんだ。

でもそれらは勝手な彼らの反応だろう？ どうして僕

一人だけが咎を負わなくちゃいけないんだろう。本当に、理不尽だよ。

「でもね、ユウヤ、僕は出会ったんだ」

月明りよりも白いセイイチの指が、眠っているユウヤの頬に触れる。

それはガラス工芸作家が手作りで作った対のグラスを扱うよりも、慎重なものと大事な壊れ物を扱う仕草だ。

「僕に絶対に嫌な感情を起こさせない稀有な存在に」

そつとユウヤの頬にセイイチは手をかける。

「ユウヤ知ってる？ 月はね地球に同じ方向しか見せないんだ。誰も月の裏側を見ることはできないんだ」

謳うように呟きながら、セイイチはユウヤに口づける。決して壊さぬように。

月を目の端でとらえながらユウヤを味わう。それはセイイチのほうが震えて壊れそうなほどの不安定な口づけ。

「ユウヤ。僕は月がとても好きだよ。大嫌いになれるほどにね。ユウヤ、僕はイトウエリナさんは嫌いじゃなかったんだよ。でも、ユウヤの恋人として振舞うイトウエリナさんは嫌いだ」泣きそうな震える声。誰も聞いたことのない、セイイチの月にだけ見える裏側。

\* \* \*

「ユウヤ、ユウヤ！」

そつと、腕をとりセイイチはユウヤの体をゆるする。

「…」

「ユウヤ、起きてよ。こんなところで眠ってしまったら、疲れてしまうよ」

「…おれ、寝てた？」

「寝てたよ。駄目だよ。ソファで寝たりしたら。ちゃんとゲストルームに行ってくれないかな」

「このソファおれのベッドよりはるかに寝心地いいからなあ…」

そう言いながらも、ユウヤは腕を上げ背筋を伸ばす。

「ボクも飲みすぎたみたいで、もう少ししてからシャワーを浴びたいから、ユウヤが平気なら先に行ってくれないかな。着替え類はいつも通りにしておくからね」

「わかった…って相変わらず洗濯機使いきれないのか」

なんでもそつなくこなすセイイチだが、なぜか洗濯機が扱えない。衣類はすべてコンシエルジュに託して、クリーニング店を使っている。

「別に困っていないからいいだろう」

拗ねたように告げるセイイチ。これはユウヤが珍しくセイイチをからかうことができる話の種だ。

「じゃ、先に風呂借りるわ。洗濯もついでに明日してやるよ」  
完全防音のマンションだし、ちゃんとランドリールームもある。

「着替えは適当においておくよ。この前持ってきていたのじゃ寒いだろう」

五月の時に置いていったのは半そでに短パンだった。確かに季節的には寒いかもしれないが、セイイチの部屋は湿度も湿度も常にちょうどいい。

だが、ここは素直に借りようとユウヤは笑う。

「何笑ってるんだい」

「いや、お前って、人に服貸したり、借りたりするの嫌がりそうなタイプに見えるのに、案外平気でするよなって」

「そんなこといちいち友達に気にしないだろう。さすがに下着は嫌だけれど」

真顔で応えるセイイチにユウヤは笑い転げる。

「それはおれも嫌だ。ついでに言うとな着をクリーニングに出すのも嫌だ」

なぜ下着をクリーニングに出すのが嫌なのかは以前から

どうしてもセイイチに理解できない感情らしく、そんなセイイチにユウヤはの笑いは止まらない。

「ユウヤ」

「悪いおれもまだ酔いが残ってるみたいだ」

笑いながら、ユウヤは勝手知ったるセイイチの部屋を自由に使い始める。

「まったく、君は…」

ドアの向こうに消えたユウヤに告げる言葉を失って、セイイチは月を見る。

月も自分を見てるようだとセイイチは思う。 否、月だけがセイイチのすべてを見ている。

\* \* \*

本当は私は論すべきだったんでしょね…とタカトリユキは前置きしてイトウエリナについて知っている事を教えてくれた。

彼女、芸能事務所にスカウトされたって私にわざわざ言いに来たの。会ったのはその時が最後よ。私でも知ってるくらい有名な事務所の名刺だったわ。

女優になるんだって楽しそうにはしゃいでるように…見え

たわ。彼女も判っていたんでしょね、そんな事あるわけない、これはおかしい事だって。

だから私にだけにわざわざ言いに来たんだと思うの。おかしいって判っているけれど、私には自慢せずにいられなかったんでしょね。

『よかったわね、活躍楽しみにしてるわ』って言ったわ。だって、それが聞きたかった言葉でしょうし…ううん。私怖かったの。巻き込まれるの嫌だなんて。だからそう答えたの。『事務所から少し痩せるようにって言われて薬ももらってるのよ。よく効くのよ。すごく痩せるの。ユキにもあげるわよ』…なんてそんなこと言われたら怖いでしょう？

確かに痩せていたわ。少し痩せすぎじゃないって心配したら、『羨ましいんでしょ』って笑っていて…ごめんなさい。私、私にだけに言いにくる彼女がとても怖かったの。

それ以前から講義には出ていなかったみたいだから…いつからかは知らないわ。そこまで仲良くはなかったもの。私は最後に大学でイトウエリナに会った人物…それだけよ。

他の子には何も話してないわ。言いふらすことでもないし。

でもやっぱり、何かするべきだったのよね…と告げるタカトリユキにユウヤは声をかける。

「そんなの怖くて当たり前だよ。タカトリさんは悪くないよ」  
電話の向こうでタカトリユキは『もし何か分かった事があればまた知らせる』とユウヤに電話番号を教えてくれた。  
「タカトリさん、危ないから自分から何かしたりしちやだめだよ？」

念を押すユウヤに『ありがとうございます気を付けます』と  
タカトリユキは電話を切った。

「なんだよ…事務所？ 葉？」

タカトリユキが嘘をつく理由はない。きっと本当にエリナは  
わざわざ知らせに行っただろう。自分でも判っているおかしな話を告げに。

「さすがにこれは困ったね」

セイイチも思案気に髪をかき上げる。

翌日の昼間、連絡のあったタカトリユキの話は荒唐無稽に  
思えたが、ユウヤはどこか冷静に真実だと思った。

エリナは楽な方に流されたんだ…と。エリナの年でそんな  
夢物語あるはずがないのに乗ってしまったのだと。

「どうするのユウヤ」

「いや、さすがにこれは家族じゃないと…あ…」

突然ユウヤは言葉を詰まらせて、それから続ける。

「家族だよ」

「え」

「昨日何か大事なことを忘れてる気がするって言ってただろう  
…普通家族に真つ先に知らせるべきなんだよ。音信不通とか」

「ああ、そういえばそうだね」

セイイチも気がついたと納得する。

「でも、オレ、エリナの実家とか電話番号とか知らない…俺も  
別に教えてなかったし」

いつでも簡単にすぐ繋がる世界は、でもやはりどこか繋がりが  
きれていないのだ。

「どうするの」

「とりあえず、何とか家族に連絡はつけてみる」

「そうだねなんとか大学側から伝えてもらうのがいいかもね。  
講義に出ていないことだし。警察は…家族の問題だろうね」

「そうだな」

事が判り、やることが決まった。エリナのことはエリナの  
家族に任せる。

「家族に連絡が付いたらこのまま別れる」

タカトリユキと同じだ。関わりたくない。それがおかしいと  
判っていないながら楽に流され、墜ちていくものに手を差し伸べる

のは自分じゃないとユウヤは思う。

「おれ冷たいのかな」

「ボクでもそうするよ。でも他ににユウヤがしたいと思う事があるなら、ちゃんと手伝うよ」

セイイチの言葉にユウヤは首を振る。家族に連絡を取る  
こと、それ以上は何もできない。したくないと。

「好きだったんだけどな」

「それと、許せないのは別問題だろう」

「許せない？」

初めて気づいたかのように呟くユウヤ。

「そうかおれは許せないのか」

「そうなんじゃないかな。もしイトウさんが本気で女優……前はアイドルになるんだって言っていたよね。それを本気で思ってた努力していたのにこんな事になってしまったのだとしたら、きつとユウヤの……タカトリさんだって反応は違ったはずだ。ボクだって多分助けようとするよ」

そしてボクはユウヤの手伝いししないとセイイチは言い切る。

「努力なんてエリナにありえないよ」

それでも変わって欲しかった。流されてなんて欲しくなかった。今怖い思いをしているのだろうか。当たり前だが

心配と不安は募る。

それでもユウヤはそんな恋人と別れる決心をした。家族の事すら知らない、そして自分も知らせていなかった恋人と。

\* \* \*

とりあえず手段を講じて、イトウエリナと音信不通であることが家族に通じることになった。そこまでして、ユウヤは明日は仕事だからと帰って行った。

一人きりになって思い出す。

褒めたことがある。『女優になるの。そのために上京したのよ』と微笑むイトウエリナに『素敵な夢だね』と褒めたことがある。

誰からも肯定されない荒唐無稽な夢を褒めてもらえた喜びに、彼女は頬を紅潮させた。

その時一度だけ、僕はイトウエリナを可愛いと思った。

「あのときの僕の表情が、君を後押ししたのかな」

本当に素敵な夢だと思ったんだ。

でも、僕はあの時どんな表情でイトウエリナを褒めていたのだろう。居酒屋で騒いでいたどこかのサークルの人間たちは、その時の僕の表情をどう取ったのだろうか。

月に誓えるほど、不実な物言いはしていないと、心から褒めたと言い切れるのに。

「もしかすると、僕はイトウエリナさんに酷いことをしたのかもしれない。ごめんねユウヤ」

ああ、こうして、僕は今夜もあの月の夢を見る。



うた。

恋音　ちひろ

男が女に和歌を送り、女はそれを見てその人を判断し、和歌を送り返して結婚したという話は、古典で勉強した事だ。

まさか、大学生にもなって、大の苦手だった古典の話が掘り返されるとは思わなかった。

隣で黙々とノートに向かっているのは、付き合って三年になる悠太。先程、唐突に古典の話と無茶振りをされ、私は啞然としながら彼が書き上げるのを待っている。

——俺の歌詞に、ピアノの旋律を付けて欲しい。

悠太の歌詞に、私のメロディーを付けて返す。古典の話なんて、ただのこじつけだよねって思ってたけれど、それを言うとは拗ねるので、心の中に閉まっておく。

悠太とは、高校一年の夏に出会った。私がプチ家出を決行し、夜道をさ迷っていると、悠太がさびれた商店街のシャッターの前でアコースティックギターを持って歌っていた。

私たちが生まれた頃に流行っていた、リバーズの「Hold You」だった。彼の歌声、歌うスタイル、選曲、全てが好きだった。

数週間後、思い出してそこを訪れた時も、彼は変わらず歌っていた。徐々に彼の歌を聴きに行くペースは上がった。そしていつしか、毎日彼の歌を聴きに行くようになっていた。雨の日も、風の日も、雪の日も、彼は歌っていた。オリジナルの曲を歌っている時もあった。

彼とは、翌年の春になるまで話すことは無かった。

その日、彼の方から私に話しかけてきた。

「その制服、南高か？」

「そう、ですよ」

「俺、山石高の二年。中川悠太。いつもさんきゅ」

「えっ。同じ歳……！私は、名取麻耶です。中川くんの歌い方、すっごく好き」

そんな会話から始まって。いつしか、よく話すようになって。彼は、私のために歌うようになった。麻耶が一番分かってくれるから、なんて。

冬、私は進路に揺れた。でも、親の反対を押し切り、音楽に進むことにした。彼が、この道に進むことを知っていたから。夏に付き合い始めた彼のことを、親は知らない。言うつもりもない。ただ、三歳から続けてきたピアノを、辞めたくはない。その一点張りで、無理やり押し通した。

そして私は今、悠太と同じ音大に居る。悠太はギターコース、私はピアノコース。こうやって、毎日大学の食堂で会って、お互い課題をこなしている。今日は、課題でもなんでもない。悠太の気まぐれ。自由奔放な人で、本当に困る。まあでも、そこも含めて好きだから良いんだけど。

「出来た！出来たぞ！」

嘘……。悠太が歌詞を書くところは初めて見たのだけど、こんなにも早いなんて。まだ長針がわずかに九十度しか動いていない。

得意気に差し出す紙を見て、私はまたも啞然とした。

完璧だった。いや、私の中では。

今夜二人で星を見に行こう  
何も無くていいただ静かに眺めるだけ  
非日常のような fantasy のような  
そんなひととき

君が居るだけとてもシンプルな  
だけど特別なこの瞬間待ちわびてた  
もやもやも忘れ嫌なことも忘れ  
あったかい気持ちになるんだ

月が綺麗ですね。なんて定型句は使わない  
ただ真っ直ぐに愛してるって  
言えっこないけど

それでもここにいて欲しい  
毎日が美しく輝き出すから  
君を幸せにしてみせる  
これから何が起こっても  
君となら乗り越えて行けそうなんだよ  
ずっと優しい顔で居て欲しい

もしも路頭に迷ったとしても  
進む方向に道開いていけるように  
灯火のような お守りのような  
君の言葉を抱いて行くんだ

ずっと走り続けていく難しさに気付いた  
でも止まること決まてないよ  
君思い浮かべ

いつでも傍にいるような  
ぬくもりを感じているからこそ  
今日も立ち上がったんだって  
毎日感謝しているよ  
君が居る それだけで力が漲る  
ずっと無邪気なままの君が好き  
心が振り切れそうな夜に見えた月は  
君の心みたいに美しかった  
もうちょっと頑張ってみようかな

明日もここにいて欲しい  
毎日が美しく輝き出すから  
君を幸せにしてみせる  
これから何が起こつても  
君となら 乗り越えて行けそうなんだよ  
ずっと優しい顔で居て欲しい

ずっと君だけを守りたい

私が曲を付けるのも、もったいない。そう思ったのに、  
悠太は私が付けるから意味があると言い張る。

その日の晩、自分の部屋でメロテイーを付けた。ふと窓の  
外に目をやると、美しい月が見えた。

# 月と少女と黒猫と

## レナード・グレイスノート

いたって気付いたけれど……

そのままだったら、多分気づかれずに忘れ去られていたのかな？」

少女は人間達が住んでいたと思われる建物の残骸を見渡し、側で毛繕いをしている黒猫に話しかけようとする。

「月が綺麗だね。前はこんなに綺麗な月なんて、ここじゃ見れなかっただろうに……」

足をじたばたさせながら座っている少女の側に、一匹の黒猫が寄りかかる。

「おや、どうしたんだい？」

少女がそう言ってネコを手招きすると、その黒猫が彼女の足下へ近づいて座っているところに飛び乗った。

「昔はさ……この場所も、ビルの光や街灯の光で彩られていたんだろうね。」

元々あった月の光が隠れてしまうぐらいに……

誰もが月の存在を忘れて、忙しく生活するぐらいにはさ……」

少女が黒猫に向かって話しかけるが、黒猫はそんなこと気にせず自分の毛繕いを始める。

「人間達がお互いにお互いをつぶし合ったから、やっとそこに

昔、まだ人間がこの惑星<sup>ちきゅう</sup>で生活をしていた頃……

人間達は戦争という大喧嘩を始め、その結果この惑星<sup>はし</sup>からいなくなってしまった。

何故戦争という大喧嘩が始まったのか。

何故人間達はこの惑星<sup>はし</sup>からいなくなってしまったのか。

元々は何かしらの意見や立場の違いだったのだろう。その違いが大きな差となり、修繕できないぐらいの亀裂となり、人間達はお互い同士、意見の違う人種を一人残らず消してしまおうと……自分たちが持っていた兵器を相手に向かって発射した。

その結果、人間達は自分たちが起こした戦争で人口を大幅に減らし、一時は無益な戦争を止めようという人達も出てきたが、その声も戦争の声に消え……

人間は自分で自分たちを消し去ってしまった。

そんな出来事から数十年経った後、一人の少女が湖の近くで月を見上げていた。

「あれからだいぶ年月が過ぎたけど、月の光は昔から変わらないんだね。」

人間達が住んでいようがいなかりうが、月の光が変わることがない。

あれだけの……

あれだけ人間達がいなくなるような戦争があったというのに、月は全然変わらない。

人間達がいなくなっても、世界は全然変わらないんだね……」

少女は黒猫を抱き上げ、抱きしめる。

「人間達がいなくなっても、月や空の景色は変わらない。

人間という種族がこの惑星<sup>ほし</sup>にいたという記録がなくなるだけで、世界は普段と変わらないんだね……」

少女が少し悲しそうな表情を見ると、抱きしめていた黒猫は彼女を慰めようと顔をなめ始める。

「ありがと……」

少女はそう言って黒猫を下ろすと、ゆっくりと座っていた

場所——墜落して朽ち果てた戦闘機の機首——から立ち上がる。

「そろそろ行くね。ネコ君、達者で暮らせよ?」

そう言って少女がその場を去ろうとすると、黒猫は少女と一緒に行くとする。

少女は黒猫の姿に気づき、屈み込むと、黒猫は少女の手をぺろぺろとなめ始めた。

「ネコ君、一緒に行くかい?」

「にやあ……」

黒猫は一度そう鳴くと、立ち上がった少女の足下へと駆け寄り始める。

「仕方ないなあ、それじゃ……行こうか」

少女がそう言って歩き始めたとき、少女の背中には天使の羽根が見えていた。



# テーマ外作品

# 朱色の橋の話

恋音　ちひろ

私の街には朱色の橋があつて、ある伝説が残っている。

昔、天女が灰色の橋に降り立った時、衣の長い裾を引つ掛け、派手に転んでしまったそうだ。何人もの人が見て見ぬふりをし、通り過ぎていく。そこにある男が通りかかった。

その百姓の男は、若くして両親を無くし、身寄りもなく、独り苦しい生活を送っていた。しかし、貧しいながらも転んだ天女の手当てを行い、食事を用意し、一生懸命に尽くした。

天女はその優しさに惚れ、天に還ることもなく、一生をその男と共にした。男が一生を終えた時、天女は自らの衣の『朱色』で、この灰色の橋を染めた。

今では『縁結びの橋』などと呼ばれ、ちょっとした観光スポットとなっている。

小学生の頃に、祖母からそんな話を聞かされたものだから、その時からいつかは『運命の王子様』に出会えると思っていた。母親もその話を聞かされて育ち、私に朱愛<sup>とあ</sup>なんて名前を付けるほどだ。中学生になって、友達と過ごしているうちに、ふと恋愛とは無縁の人生を送っていることに気づいた。

運命などない——。それが常識なのだ。

大学生になった今、身長百六十五センチメートルの私に、一向に恋愛の足音は聞こえてこない。

オフホワイトの耳あてに、キャメルのコート。ベージュのムートンブーツに、アイボリーの手袋。これが、私の冬の正装。

もう少し、可愛い服の似合う女の子に生まれたかった、なんて鏡の前で思う。この身長で、服だけが可愛くてもなあ……。

下駄箱のくまのぬいぐるみに「行ってきます」を告げ、一人暮らしのアパートを出る。

大学まで、自転車で三十分。バイト先まで、自転車で二十分。いずれにせよ、川を一つ渡らなければならないので、私は毎日その朱色の橋の上を通らなければならない。

「縁結びの橋だよ！」なんてはしゃぐ彼女と、何となく照れくさそうな彼氏。

三日に一回はこんなカップルに出会うけれど、大学三年になっても、夢見た恋愛とは無縁な暮らしをしてきたものだから、少し目を伏せたくなる。

今日は、土曜日。バイト先のケーキ屋さんへ向かう。パティ



シエの圭子さんは、三十代前半で二児の母。

お弟子さん達には成長して欲しい、と厳しめのようだけど、バイトの私達にはとても優しい。

私は、陳列やレジ打ち、隣にあるカフェのオーダー取り、たまに圭子さんの子供たちの相手をする位で、全く不満を抱えることなく働くことが出来ている。

昼過ぎから閉店まで働き、余ったケーキをバットに入れ、店内の掃除が終わった所で、圭子さんが声をかけてくれた。

「朱愛ちゃん、お疲れ様。これ今日の分、持って帰ってね」

そう言つて、余ったケーキを箱詰めしてくれた。

「ありがとうございます」

ひっくり返さないように、背中のリュックに入れて自転車を漕ぐ。二十時の冬の夜は、真つ暗だ。そのせいだろ。前に居た人に気付かなかったのは。

気付いた時には、体に鈍い痛みが走っていて、ひんやりとしたアスファルトの上に横たわっていた。

辺りを見回すと、黒いスーツケースと、倒れた男性。慌てて立ちあがつて、声をかける。

「ごめんなさい！ 大丈夫ですか!？」

するとその男性は、髪をくしゃつとしながら、ゆっくりと

起き上がつて言った。

「大丈夫。ちょっとびっくりしただけ」

「本当にごめんなさい!」

「俺は、スーツケースがクッションになったから。それより、君は大丈夫?」

「大丈夫です!」

そう元氣よく言つた後で、思い出した。背中のリュックのケーキを。

慌ててリュックを開けて、中を見る。

「あ……」

もちろん、無事な訳が無い。

「それって、ケーキ?」

「そうなんです。ケーキ屋さんでバイトしていて、余り物を頂いたんです」

「お詫びっていうのも何だけど……ちょっとお茶でもどう?

無理にとは言わないけど、明るい所行きたいし」

「お詫びしたいのは私の方です! ぜひ!」

初対面なのに、何で「ぜひ」なんて言っちゃったんだろう。そんなことを思いながら、男性の隣を歩く。沈黙を破ったのは、男性の方だった。

「俺は、前川進。君の名前は？」

「私は、中川朱愛<sup>とあ</sup>です。朱色の朱に、愛」

「朱愛か、良い名前だね」

名前に良いも悪いもあるのかなと思ったけれど、前川さんは続けて言う。

「俺は、進でしょ？ 常に前に進めーみたいなの。寄り道しなかったら、人間つまらなくなるもので。朱愛ってさ、温かいイメージ。安らぎとか、ゆとりとか、癒し系だね」

そんなこと考えもしなかった。暗くてあまり分からないけれど、きっとこの人は私よりもずっと年上で、大人なんだろうと思った。

そうして着いたのは、近所のお洒落なカフェバーだった。四人席に向かい合わせになって座り、リュックとコートを隣の椅子に置く。

進さんの顔を見ると、二十代後半から、三十代前半といったところだろうか。素敵なオーラに、爽やかなルックス。

ワックスでキメたであろうその髪型は、テレビに出ている美容師さん並。ケーキとカクテルを頼み、改めて向き直る。

カクテルは、名前を見てもさっぱり分からないから、進さんにお任せした。

今更ではあるけれど、男の人と二人きりでカフェバーに入ったことがないことに気付いた。

ましてや、初対面の人と何を話せばいいのだろう。どこまで聞いていいのだろうかなんて考えている内に、つい俯いてしまっていた。

「朱愛ちゃん？」

「はい？」

「ちよつと強引だった？」

「いや、そんなことは……」

きつと、俯いているのは、嫌がっているのに断れなかったからだと思われたみたい。そんなことは、ひとつもないのに。「俺、数時間前にこの街に来たばかりで。アラサーなのに独りで新しい街でやっていけるかな、なんてぼーっとしてたから悪かったなって思ってた」

「こちらに来られたのは、お仕事の都合なんですか？」

「そうそう、転勤」

「実は私も、大学合格してからこの街に来て、一人暮らしなんですよ」

「へえ。そうなんだ」

心なしか、前川さんの声のトーンが明るくなったような気がした。

お酒が入って、ちょっとオープンになった頃。

「朱愛ちゃんって、大学生とは思えないくらい凄い大人っぽくて落ち着いているけど、可愛いし無邪気な所もあるよね」

「えーそんなことないですよ」

「だって俺、最初朱愛ちゃん見て、年下だろうとは思ってたけど、二十代後半くらいだと思ったからね」

「それって、老けてみえてるってことですよね…」

「違う違う。色気があるってことだよ」

「うわあ。何てことを…」

「いや、その、何ていうの…落ち着いてて、綺麗でっていうか…その…」

慌てる前川さんが面白くて、でもちよつとその言葉が照れくさくて仕方がない。俯いて足を組み替える。

「そういや、前川さんっておいくつなんですか？」

「三十二だよ」

「お一人っていうのは、単身赴任なんですか？」

「いや。彼女すら居ないからね。今までこの人って人が居なくて」

学生時代から今までずっと、モテたであろうに。ちよつぱり口を尖らせる。

「前川さんなら、選り放題でしょ？」

少し、茶化してみる。

「いや、本当に好きになった人はみんな、離れていっちゃったから。モテる方が、本当に好きな人と付き合えないもんよ」

私には無縁過ぎて、何が何だか分からない。モテる人とは世界が違うな、と痛感させられた。

「大人になって、ある程度のキャリアなんかが付いてくると、余計ロクでもない人が寄って来て、出会いすら良いものが無くてね」

そう嘆く前川さんに、朱色の橋の伝説を話してみることにした。

「まるで、俺と朱愛ちゃんみたいだね」

そう言われてみれば確かに、あの橋が無ければ、私達は出会わなかったかもしれない。

「本当ですね」

だからと言って『運命の王子様』なんて、思わない。十一も離れているのに――。

そうして、あつという間に二時間ほどの時間が過ぎ、私達はそれぞれの家に帰ることにした。

お財布を出す間もなく、前川さんにご馳走になり、最後は家まで送っていくなんて言われたけれど、そんなことまでしてもらう訳には行かない。

ご馳走して貰ってしまったので、連絡先を交換することにした。お店の前で別れて家路につく。

その途中で、家に帰って何をしようか考える。まずは、お礼を言おう。そして、お風呂に入って寝よう。

転んだ時の痛みが翌日ひびかないといいなと思いながら、布団に潜り込む。

翌日。二日酔い気味で、大学に行く。親友の暁美は、私が普段お酒をほとんど飲まないことを知っているので、とても心配された。

「私と飲みに行かないのに、誰と飲んだのよ」

「一緒に飲みに行かないのは、暁美が強すぎるからだよ。昨日、ちよつと自転車で男の人に当たっちゃって…その人が連れて行くっていうから、カフェバーに入ったの」

「カフェバーって、あそこの heart time のこと？」

「んー確かそんな名前」

「あそこのカクテル、度数強いよ？ その人、初対面の朱愛を酔わせて、何をするつもりだったのやら…」

「そんな人じゃないよ」

確かに、heart time に入ったのは、前川さんがそこに行ったからで…。

よく考えたら、通り道に他にもお店はあったはずなのに、どうして初めてこの街に来た人があんなお店に入ったのかは分からない。

「で、昨日何飲んだの？」

「カクテル。前川さんにお任せした」

「その男、前川っていうのね。カクテル、どんな味？」

「オレンジジュースに、お酒混ぜたみたいだよ」

「スクリュー・ドライバーじゃない？ やっぱりその男危ないよ」

「だから、そんな人じゃないってば」

「聞きなさい。スクリュー・ドライバーは、レディー・キラーって言って、飲みやすいけどアルコール度数が高いの。」

これから絶対飲んじやダメだからね。特に、朱愛みたいな娘はすぐやられちゃうんだから」

結局、暁美には前川さんのことを分かってもえなかった。それでも何故か、前川さんのことを信じたいと思っている自分が居た。

前川さんとのやりとりは、そんなに多くはないけど、それでもあの日が夢に出てくるくらいには、私の中に住みついて

いた。

二週間が経ったある日。食事でもどうか、とお誘いが来たので、すぐにOKの返事を返した。

今度の食事はお昼だったので、二人ともお酒は飲まなかった。私の大好きなパスタを食べ、見晴らしのいい公園でゆっくり休む。

そこで、暁美との話を思い出し、意を決して聞いてみることにした。

「あの」

「どうしたの？」

「この間私が飲んだのって、スクリュ・ドライバーですか？」

「そうだよ」

「どうして、あのカクテルに？」

「あははっ。朱愛ちゃんオレンジジュースが好きでしょ？」

「何で知ってるんですか？」

「だって、かばんの中にオレンジジュース入ってたもの」

どうして、かばんの中身を知っているのか…。謎はまだ解けない。

「なんでかばんの中身知ってるんですか。まさか、透視能力とか!？」

「いやいや、そんなバカな。転んだせいで、ケーキ潰れちゃってたでしょ。あの時に、ちらっと見えて。女の子のかばんの中見るなんて、ちょっとモラルが無かったかな」

そうだった。透視能力とか、ふざけたこと言った自分が恥ずかしい。

「透視能力か…人の心を透視出来たらいいのにね」

「誰か透視したい人居るんですか？」

「ん？まあね」

「えー。誰だろう」

「内緒」

やっぱり、前川さんは暁美が思うような人じゃない。とても優しくいい人。そんな風に思えた二回目のデートだった。

最初の出会ってから、一ヶ月。今度は、ドライブのお誘いだった。小さい頃の話、学生時代の話、前に暮らしていた街の話。助手席の私に、いろんな話をしてくれた。

辺りが暗闇に包まれた頃、またあのカフェバーで話した。すると、突然前川さんがこう切り出した。

「あのさ。ここ、俺の職場なんだ」

え？ 驚きのあまり、声が出ない。前川さんは続ける。

「支店のオーナーみたいな。と言っても、ここの店舗に来たのは、朱愛ちゃんを連れてきた時が初めてだったんだけど。隠してごめんね」

「いいえ。謝られるようなことでは」

「いい歳して、何を考えているのか分からないけれど」

そう言つて、前川さんは席を立ち、カウンターの下から何か取り出す。

それを後ろに隠して、私の前にかしこまった様子で立つ。

そして、ひざまずいて差出したのは、青い三本の薔薇の花束。

「俺と付き合ってください」

体が急に熱くなるのを感じた。緊張が走る。きっとそれは、前川さんも同じなんだろうけど。

運命とか王子様とか、信じられないと思っていたけれど、前川さんとの出会いは運命そのものだと思う。出会った日のことは、忘れることが出来ないだろうな。

返事はもちろん……。

「お願いします」

前川さんが、くしゃくしゃの笑顔になる。

「断られたらどうしようかと思ったよ」

ずっとその笑顔を忘れないで居て欲しい。

付き合うなんて、恋愛なんて分からない私だけど。

「断るはず無いですよ」

だって、運命なもの。

# 手を振る少女——中編——

卯月 美雪

「もしかして、私が見えるんですか？」

「え……？」

その突拍子もない言葉に俺はうろたえた。うろたえたのはその妙な発言に対してだけではない。それより、もつとうろたえるべき事がある。彼女の胸が俺の腕を通して透けているのだ。

まるで、水の中に手を入れているようだった。ただし、何の感覚もない。

俺は何が起きているのか分からず、ただあっけらかんとして彼女の顔を見ていた。

すると、彼女は続けてこう言った。

「私——死んでるんです」

「…は？」

死……いや、何て…言った？

「幽霊なんです」

「ゆ……っ!? はあ!？」

馬鹿馬鹿しい、そんなわけない、幽霊なんて存在するわけがないだろう——そう頭で思っても、俺の腕と彼女の胸がその

ことを証明していた。心では分かっている。これは本当だと。

「……えーっと、腕…だけでもええませんか？ もちろん

何も感じないんですけど、私、体を通り抜けられるの嫌なんですよ」

「へっ、あ……わ、悪い…」

俺は困惑して頭が真っ白になりながらも、腕をどけた。幽霊……。そんなもの、一度だって信じたことはない。だが、彼女がそうなら今の現象の辻褄が通るのだ。

だけど…しかし…でも…。

ぼーっと考え込んでいると、彼女は尋ねた。

「…確か、おじさんっていつも私と同じ駅に降りますよね？」

「なっ、俺はまだおじさんじゃない!!」

「そこ気になる!? あっ、シーッ! おじさん以外に私は見えないんですから!」

ハッとして後ろに振り向いてみると、彼女と同じ制服を着た女子高生や『本物』のおじさん達が、不審そうにこちらを見ていた。

俺しか見えない…? 本当に? というか、もうこの電車に乗りたくねえ…!!

そしてまたさらっとおじさんって言ったな、お前。

「……ここじゃ人目が多すぎて話にくいです。電車を降りたら、私に着いてきてください」

「は？ あっ……」

彼女が幽霊だとか俺にしか見えないだとか信じきったわけじゃないが、俺は一応声のポリュームを下げた。

「なんでだよ……！ 俺、仕事があるんだけど……」

「少しでもいいんです。時間をください。『見える』あなたに頼みたいことがあるんです！」

「頼み……？」

彼女は真剣な眼差しで俺を見た。何か重要な頼みがあるらしい。面倒事はごめんだが、彼女の正体も気になるし、それにこれを断って取り憑かれでもしたら敵わない。

彼女が本当に幽霊ならの話だが。

「お願いします……っ！」

何ぶん、変な性格はしているが、俺はどうしてもそういうオカルト的存在を信じきれない性格だ。けど——それでもだ。つまらない、いつもの日常から抜け出せそうで、俺は彼女に手を差し伸べてしまった——。

「……わかったよ」

「あっありがとうございます!!」

随分、声の大きいお嬢さんだなと思いつつ、彼女はとても嬉しそうに深々と礼をした。

いつもの駅に降り、俺は彼女の言う通りに着いていった。住宅街にそって歩き、角を曲がり、そして路地裏へと入ったところで彼女は止まった。

「ここなら大丈夫でしょう」

「それで、頼みってのは何なんだ？」

「……えっと、ですね」

ここに来るまでずっと平静だった彼女の表情が歪んだ。そして一呼吸して、口を開いた。

「——助けて欲しいんです。『彼』を」

俺は、その奇妙な答えに驚いた。

「『彼』？ 君じゃなくて？」

「はい」

俺はてっきり、彼女のやり残した事の手伝いを頼まれるのかと思っていた。

最後にお母さんのご飯が食べたかったとか、ピアノが弾きたかったとか、読みたかった本があるとか……本以外は手伝えそうにないな。

「それで、助けてい彼って？」



「私の彼……いえ、彼氏だった人です」

彼氏……恋人……それって――

「もしかして、朝にいつも君に手を振ってる子？」

「え、なんでおじさん知ってるんですか？」

「だからおじさんじゃないっての!! さっきも言っただろ」

「あ、つい」

何がついだ。

「でも、おじさん以外に何て呼べばいいんです？」

彼女は少しおかしそうに笑って聞いた。

「普通にお兄さんでいいだろ……」

「お兄さん……って年です？」

「そうだよ！まだ二十三歳だぞ!!」

「えっ、見えない……」

「お前わざとか!？」

そしたら彼女はツプと吹き出して、だははは！と笑いだした。おしとやかそうな見た目からは想像できない少し豪快な笑い声だった。俺はもう、半分涙目になっていた。

そして、満足するまで笑うと、こちらにまっすぐ向き直って言った。

「じゃあ、何で彼のこと知ってるのか教えてください？おにーさん」

キメ顔で。

「なるほど、じゃあ見て知ってただけなんですか」

「あ、ああ……」

彼女に彼を知った経緯を伝えた。そして、一度不思議に思ったら小さなことでも気にし続けてしまうこの変な癖の事を……。長い……。『気になり癖』とでも名付けよう。

それも、なぜそんなに見てたのか不審に思われては困るので、一応伝えた。

「でもそんな恥ずかしがって話すことないじゃないですか。誰かを見かけて、その人の事を覚えることなんて、そんな癖がなくとも誰でもあるでしょう？」

「まあ、そうなんだが……」

俺が恥ずかしがっているのはそこではなくて、こんな癖のことをわざわざ説明するのがどうもこっぴどくしかったのだ。

この癖のことを知っているあの同僚も俺が説明したから知ったわけではなく、長く一緒にいて自然に分かったのだから、何度か会ったとはいえ、ほとんど初対面の彼女に伝えるのは、急に自分のことを全部知られたようで嫌なのだ。

「変なの、そんなの堂々としていればいいのに」

「え」

心の中を覗かれた気がして、ギクリとした。もしかして、幽霊という非科学的のものにはそういう能力があるのか…？ クソッ、同僚のアイツに聞いておけば良かった。

アイツ、〃そういうこと〃に関しては誰よりも詳しいんだよなあ…。

「だって、人は皆それぞれなんだから、そういう…その…やたらと恥ずかしがり屋さんな人も、他にいるかもしれないじゃないですか…？」

「そっちかよ!!」

そっちかよ!!!

「え、何だと思ったんですか…？」

「うるせつ、もう言わねえよ!」

「まあまあ、そう怒らずに…あつ!」

彼女はあからさまな感動詞を声に出すと、ニヤニヤしながらこう言った。

「もしかして…。癖の方のことだと思ったんです？」

「ち、違っ…」

当たり前だよ!! まったくこの野郎……野郎では無いが。

「わっかりやす〜! おじさん、純粹だねっ! あ、また言っちゃった…」

もういい、もう俺のことは理解しただろうから次へいつて

くれ…っ! そしてペロを出して言うんじやない!

「くどい!! もう本題に入ってくれないか!」

「あ、おじさんの事いじるの楽しくて忘れちゃった…。うん、分かった! 言うね…」

そう言うお前は素直だな…。おじさんビックリ…あれっ、おじさんじゃないぞ!?

心の中でちゃんと訂正する前に彼女は語り始めた――。

「私の彼氏……もとい、彼はね。私が、まだ電車の中にずっといると思い込んでるみたいなの。もう……死んでるのに。」

「電車の…中に……あ——だから、お前は幽霊で見えないはずなのに、〃彼には見えているような、そんな素振り〃をしていたのか!」

「そう、本当にそうなんです」

「なるほど…」と、思いつつ、今まで不自然に思っていた点が線になっていくのを感じた。

「おじさんって、思ってたよりすごい。そういう不自然な点に気づけるって意外とできないですよ!

第一に、私が幽霊だって分からなかったのに、そういうことに気づけたわけでしょう?」

また人の心を見透かすようなことをシンプルにさらりと

言われ、少しドギマギした。

「い、いや……その……あれだ！分かったじゃなくて、  
“気づけなかった”だろ。そ……そんな大した事なんか無いんだぞ……」

「あつ惚れないでください」

「惚れるか!!」

本当に、今日は何て日なんだ……。何て日なんだー!!!

「ごめんなさい……。そのお……むさい……と言いますか……  
気持ち悪かつ」

「もういい」

「……はい」

正論だけど無性にうぜえなこいつ。しかも気づいたら敬語抜けてるし。俺のキャラも『ブレブレ』なんですけども。

「でも、“むさい”なんて言葉よく出てきたな。もう使ってるの、俺か歳上の人だけだと思ってたよ」

「現代文はいつも、ほぼ満点だったので！おじさんは知らないでしょうけど、モテてたんですよ？ 結構」

彼女のドヤ顔に納得しつつも、どうもペラペラ喋ることに、気がかかった。

「なんでお前、そんなに見ず知らずの俺に色々話すんだよ？  
もしかしたら悪い人間かもしれないだろ。お前がさっき言っ

た（人は皆それぞれ）は、悪い奴の事も含んでは思うぞ。」

「あ……ははつ。分かってますよ、言われなくともね。でも、  
多分……“人”と話すのはすごく久しぶりで、興奮しちゃってるんだと思います」

照れくさそうに淋しく笑った彼女の横顔に、あの、大人びた顔で手を振る横顔が重なって混ざった。

「……言えよ」

「ん？」

俺の顔を伺うように彼女は首を曲げた。

「だから……俺には分からないけど、大事な事なんだろう？  
早く、言えよ」

そしたら彼女はクスツと笑ってから、すぐ真顔になって、  
また話を始めた――。

# 執筆者メッセージ

題名 … 月明かりの空の下

テーマ… 月 旅人

最初、前に書いた「旅と馬車と青い空」で出てきた旅人の子をもう一度出したいなと思っていたときに、テーマ「月」というお題が出たので、ショートな文章ではあるけれど書いてみました。

なお、例によって作業用BGMを聞きながら書いていたのですが、そのBGMは月と全く絡んでおりません。

ちなみに旅人の子については名前も性格も、性別すら決まっています。旅人の子について「大きな荷物を背負った小さな子。背中に大きいスコップが生えていて、護身用の拳銃を持っている」ぐらいしか決まっています。

と言っても、イラストは実はあつたりしますけど（爆笑）  
某ライトノベルに若干汚染されていますが、多分キノセイじゃありません↑

題名 … 月光 — Moonlight —

テーマ… 「月」「花火」

二〇〇四年に書き、当時あった自分のホームページに掲載していた作品「月光」の加筆。修正版です。

多分当時、「Moonlight」という曲を聴いていた時に

浮かんだ風景を文章という形にしたと思います。

今回は当時の文章に、後書きで書いてあった所を本文に記載しつくりかない所などを修正した形になっております。

なので、所々昔と今との書き方がごちゃ混ぜになっているところがあるかもしれません。

—— 当時の文章より。

文明（都市）が減び、東京や大阪と言った大都市は復旧などは未だに出来ていないが、ほとんどが田圃とかに囲まれた生活を送るようになってると言うような感じです。

（廃墟になったところからの再生中と言うところもあります。この話ではまさにそれです）

出てくる二人には設定とかはありません。

そしてこの話自体、多分続きません（笑）

何となく思い浮かんだ物を色々と……

ごねごねとかき合わせてぐつぐつ煮込み……

適当に作ってみました。

とのことです。

—— 追記 ——

この文章を見直してもらったため、色々と手直しが入っております。

# 題名 …月と少女と黒猫と

テーマ…月 魔墟 少女

とある曲を聴いていたときに浮かんだ景色を元に、書いてみたショート作品です。

頭の中には既に滅び去った文明の中で月見をする少女と黒猫というイメージがあったので、そのイメージを浮かべつつ書いてみました。

本文の中でも書いたつもりですが、この作品での文明は完全に滅亡をし、人間は全滅しています。

いつもは細々と生きていたような人間も、時には思いっきり滅亡させても良いかなと、やってみました。

もしかしたら、近未来でこう言うようなことが起きるかもしれませんね。

…出来ればあって欲しくはありませんが。

少女の台詞内に、昔書いた作品「透明（キレイ）な夜景（ソラ）」で使った台詞を書き換えて使っています。

皆さんに、私の中に浮かんだイメージが見えたでしょうか？ イメージが浮かぶような作品に仕上がっていますでしょうか？

最後の方にある「朽ち果てた戦闘機の機首の上」はゲーム、怒首領蜂大往生パッケージが浮かんだので、それを組み込んでみました。

（レナード・グレイスノート）

# 題名 …月が、見ていた

今回の文芸部はテーマを決めて書くという事になりました。テーマは「月」です。

「月」という存在は人の心を捉えてやまない気がします。

古今東西、月にまつわる話や歌もたくさんあります。

今の私から生まれた「月の話」は、一人の青年の物語でした。楽しんでいただけたら幸いです。

（叶冬姫）

# 題名 …手を振る少女―中編―

いやあ何というか…本当に奇妙な雰囲気の話になっちゃって、なんか、なんか、すみませんでしたア!!w

しかも長くなりすぎて『中編』になっちゃったよ！ビックリポンの塩昆布だよ!!ww（分かる人にしか分からないギャグ）作品ついて、「読んだよー！」と言ってくだされば、共に語れるのでご遠慮なく聞いてくださってくれて構いません！むしろカモン!!↑

では、読んでくださり、誠にありがとうございました！  
続きはお楽しみにっ！（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）（☆）

（卯月美雪）

## 編集室から

最後までご覧いただきましてありがとうございます。今回はたっぷり八作品。組み甲斐のある分量でございました。良作揃いで楽しみながら組ませていただきました。

いつもおなじみのPDF組版で御座いますが、今年は珍しく外部からの依頼がございました。外部からとなると勝手が違います。組み方などにもかなり差が出ますし、とりわけ書体につきましては好みの別れる物でございますから、ご注文の通りの物を揃える訳で御座います。

一口に「明朝体」と申しまでも各社ラインナップとして揃えており、組んだ時の字面にも当然大きな差が出る訳で御座いまして、翔愛学園文芸部ではかなり古風な書体を中心にチョイスしています。例えば本文に使っている「A1明朝」は、源流を一九六〇年代の写真植字用書体「太明朝A1」にもち、オールドスタイルに分類される明朝体です。この太さの明朝を本文に使うことは最近少なくなりましたが、中々どうしてレーザープリンタ（いわゆるコピー機）で試し刷りを行いますと、滲まない分オフセット印刷よりも細く文字が出ますので、却ってちょうど良い塩梅だったりします。

最近では、今この段落で利用しているような細めの書体が多てはやされているように思います。非常に使われている

「リュウミン」と呼ばれる書体なのですが、よく近年の文庫本などではお目に掛かる機会もあるのではないのでしょうか？

同じウェイト（細さ）でもひらがなやカタカナを混植したときのニュアンスの違いで組んだ時の印象に差が出るのが明朝体の面白いところで、例えば軽い随筆のような本であれば、「マティスVプロ」などといった書体を選ぶのも良いかもしれませんね。

また「イワタ細明朝」は、新聞書体のように非常に平仮名が大きく、多少文字サイズが小さくても、綺麗に見えるような気が致します。右段落のマティスV、左段落のA1明朝等と平仮名を比べてみて下さい。

このようにフォント選びから、既に本のイメージというのは決まっていくので御座います。文芸部ではほぼ僕の独断と偏見で書体を選んでおりますが、たまに依頼などで、違う明朝にも触れてみると、その良さを再発見することが出来たりして、中々面白いものです。

もし近い方に小説の組版でお悩みの方がございましたら、是非ご相談させていただきます故、部長、副部长などを通じてコンタクトを試みて頂きたく存じます。宜しくお願い致します。

（PDF版組版担当・厨川和真）

文芸部会誌 二〇一七年翔愛祭号

発行日 二〇一七年一月一三日 初版

編集者 三年一九組六三六五七番 恋音ちひろ  
PDF組版 二年三六組一八六九番 厨川 和真  
発行者 翔愛学園文芸部

<https://sites.google.com/site/syouaile/>

# 翔愛学園文芸部

Shoai Gakuen Literary Club